

第6章 21世紀の子どもを育む「通学合宿」への期待

第6章 21世紀の子どもを育む「通学合宿」への期待

1 子どもの居場所がなくなっている

今の子どもたちは居場所を失っている。とりわけ小学校三年、四年生の居場所がなくなりつつある。ギャングエイジの体験が少なくなっている。

家庭裁判所の調査官の方々が言うには「非行に走る子どもたちに共通していえることは、小学校時代にギャングエイジを体験していない。友達と外遊びをして集団の中でルールを身につける機会を持っていない。多くの者が屋内で一人でテレビを見てマンガを読み、それからテレビゲームをしている」という。

そして、高学年になると学校では委員会活動が増え、放課後はサッカーや野球、それから塾やお稽古でスケジュールがつまる、という忙しい子どもが出現する。

今や子どもたちの成長を促す居場所がいびつになってしまっている。子どもの生活空間を見直さなければならない時期にきている。

2 子どもの生活空間は三つある

子どもの成長を促す生活空間は大きく分けて三つある。

一つは、「身内」という空間である。基本的には血縁関係で結ばれた集団である。ここでは子どもは一番安心して暮らせる。身内は困ったとき悩みを解決してくれるし、危険なとき自分を救ってくれる。

また、この集団で子どもは基本的な生活ルールを学ぶ。人とのつきあい方や言葉遣い、食事の仕方など生きる上で欠かせない事柄を教わる。この身内の典型が家族であり、親戚である。それ以外に仲間集団と学級がこれに当てはまる。その意味から仲間集団と学級は「準身内」ということができる。

二つ目は、「世間」という空間である。この空間ではお互いが名前と顔を知っている。そして生活する上で共通な価値と規範を持っている。この空間で出会う人たちはお互いが助け合う。ただし、ここでの共通なルール（規範）を無視する者は仲間はずれにされる。

この空間は、具体的には地域社会である。だから親たちは子どもを育てるときに「人の笑い者になるような行動はするな」というしつけをする。世間体が悪いということである。

子どもにとって学校はまさに、この「世間」ということになる。学校には異年齢の人たちがいる。そしてお互いが顔と名前知っており面識のある人が多い。

また、学校には校則があり子どもたちの行動を規制している。「遅刻をしてはいけない」「タバコを吸ってはいけない」というきまりで子どもの行動を規制する。

三つ目の空間は、「赤の他人」である。この空間ではお互いに面識はない。それぞれがストレンジャー（見知らぬ人）である。そこには子どもの行動を規制する共通なルールはない。それぞれが自分の持っている価値と規範で行動する。だから、「旅の恥は掻き捨てよ」ということでバラバラな行動が生まれる。子どもにとってテレビ、ラジオ、それから漫画の世界が「赤の他人」の空間にあたる。

子どもの生活空間をこのように三つに分けると家族、仲間集団、学級が「身内」「準身内」で、学校、地域社会が「世間」になり、マスコミが「赤の他人」になる。

子どもの居場所が問題となるのは、こうした空間の働きが機能しなくなっているからである。

3 通学合宿が持つ機能

通学合宿とはどんな生活空間でのスタイルだろうか。

「夕食の準備は何時からしますか」と問いかけても子どもたちから反応はない。司会の子どもは「何か意見はありませんか」と繰り返すが沈黙は続いたまま。これは通学合宿での夜のミーティング光景である。

通学合宿とは、子どもたちが公民館などの施設で一週間程度、集団で宿泊合宿を行い学校に通う活動である。

期間中、衣・食・住に関することすべてを自分たちで行う。食材の買い出しから調理、部屋の掃除、洗濯、風呂沸かしまでをする。こうした活動は全国的規模で広がっている。

通学合宿で子どもたちに変化が見えてくる。これが三日間程度の合宿の場合、変化が乏しい。というより疲れがあり、学校の評判が悪い。

確かに、日曜日合宿にはいると興奮して遅くまで起きている。月曜日学校に行っても疲れるだけである。こうした状況は火曜日も続く。それが水曜日あたりから集団生活にも慣れリズムがではじめる。学校でも生き生きするのである。

やはり体験活動は中途半端な日数では効果が出ない。一週間程度の活動が求められるのである。

(1) 集団での役割分担ができる

冒頭のシーンは合宿二日目の一こまでである。今どきの子どもたちにとって、自分たちで計画を立て仕事の役割分担を決めるのは並大抵ではない。

だが、合宿の後半になると生活に慣れたせい意見が出るようになり、自分たちだけでスケジュールを決めることができる。

子どもたちは利便社会の落とし穴に落ち込んでいる。自分から動かなくてもよい生活に慣れている。通学合宿は、そこに落ち込んだ子どもたちが自分からはい上がる力を身につけるきっかけになる、と考えている。

(2) 仲直り文化を身につける

今の子どもたちの状況を考えると、トラブルを解決する方法を身につけていない。日本社会にはトラブルが起きたとき修復するシステムがあった。

日本は欧米やイスラム文化圏と違って仲直りする文化があった。例えば、「喧嘩両成敗」「お互いに水に流す」「手打ち式」、それから大岡越前守で有名な「三方一両損」（お金3両を落とした大工とそれを拾った左官がお互い譲らなかったのが大岡が1両を出し、二人で2両を分け合った。結果として三人とも1両損をしたことになるが丸く収まったという話）などがある。

日本は多神教だから緩やかに修復しながら解決を図ってきた。折り合いを見つけ落と

しどころを探していく。

もう一つが「けんか」文化があったのである。きょうだい喧嘩はけっして「きょうだいいじめ」とは言わない。いじめはルールがないが、ケンカはルールがある。ここが決定的に違う。

ここでいうルールとは、相手に手心を加えるということである。仮に兄が妹を泣かせた時を思い出して欲しい。弱く殴ったときと強く殴ったときの涙が違う。

そのことから兄は妹の「嘘泣き」と「本泣き」の違いを理解する。そして、相手が「参った」といったとき、それが本当か、ごまかしか、顔の表情でわかり本気の時は手を離すようになる。

子どもは遊ぶことで成長する。遊ぶとトラブルが生まれる。ここで「ケンカ」を体験する。この「ケンカ」はルールがあるので、揉まれることで成長する。通学合宿はまさに生活のトラブルと遊びでのケンカを通して仲直り文化を学ぶ場である。

トラブルがいつでも、どこでも生まれる。そして仲直りをしてトラブルを解決しないと生活ができないし、遊ぶこともできない。食事ができなく、風呂に入れなく、トランプ遊びもできないのである。

通学合宿はまさに身をもって問題を解決する。したがって、子ども社会の中に仲直り文化を復活し、定着させることが可能となる。

このように通学合宿は、今の子どもたちに欠けた「身内」と「世間」の生活空間を提供し、集団生活での人との関わり方を身につけさせるのである。

(明石 要一)